

狭山遊糸会

「広瀬斜子織」再現研究報告会

令和5年度市民提案型協働事業



狭山市立博物館所蔵 高機

2024年2月3日
広瀬公民館

目次

●ご挨拶 ～報告会を迎えて～	
狭山遊糸会 代表 野本 照子	P.2
●ご協力いただいた方より	
狭山市教育委員会 生涯学習部 社会教育課 (協働事業担当課) 安井 智幸	P.3
広瀬公民館 館長 須藤 秀毅	P.4
狭山市文化団体連合会 会長 小川 忠史	P.5
●「広瀬斜子織」の再現技術	P.6
第1章 はじめに	P.9
第2章 斜子織と広瀬斜子織	P.12
第3章 再現作業	P.19
第4章 再現織りの類似性の考察	P.33
第5章 まとめ	P.38
●広瀬斜子織再現への道	P.40
●狭山遊糸会の歩み	P.44
●資料編	
狭山市役所パネル展より	P.48
狭山遊糸会作成「一問一答集」より	P.53
狭山遊糸会調査「養蚕信仰」より	P.57

ご挨拶 ～報告会を迎えて～

狭山遊糸会 代表 野本照子

本日は、狭山遊糸会の広瀬斜子織再現研究報告会にお運び頂き誠に有難うございます。

「広瀬斜子織」の再現に取り組んでみようとなった日から、10年の時が流れました。「再現とは何か」も明確でない状態から動き始めて、全くの素人の目線で、あれこれと情報を得て勉強し、遠まわりもしながら過ぎた時間でした。その中で交流のあった多くの方々の教えから学び、援助、応援を得て今日を迎えることができ、ホッとする思いで御座います。皆様、本当に有難うございました。

振り返ってみますと、「要望書」なるものを狭山市に提出しましたところ、予想外に早く対応して下さい現在の活動場所に織り機を運んで頂いたことが、今日の報告会に繋がったわけで、当時の狭山市のご英断に心から感謝申し上げます。特に、長年に渡り活動場所を提供頂いた広瀬公民館には格別のご配慮を頂き、誠に有難う御座いました。

専門家でもない市民グループが「再現」に取り組むなど、無謀な試みではありましたが、どのような糸、道具、技術を使えば「広瀬斜子織」が織れるのかをほぼ解明できたのではと考えております。まだまだ不十分な点が多々ありますが、皆様に報告させて頂き、ご批判を頂いて更に改良を重ねていければ幸いです。今後ご指導ご援助を賜りますよう、お願い申し上げます。



2016年お披露目講演会



2016年広瀬公民館談話室にて

ご協力いただいた方より

狭山市教育委員会 生涯学習部 社会教育課（協働事業担当課） 安井智幸

斜子織は江戸時代、水富、柏原、奥富、日東、入間川村等で農家の副業として地元産の繭糸で製織して、「白魚子（しろななこ）」と称して川越商人の手を経て販売していたといわれています。天保年間までは、器械が未発達であったため、製造者は極めて少なく、なかなか増産されませんでした。慶応年間に地機を高機に替える等の技術革新があり、品質が一気に向上し、高評を得ることになったともいわれています。

その後、明治17年に広瀬組が組織されて技術研鑽が行われ、明治26年には広瀬組の名でコロンビア博覧会に斜子織を出品して賞を受けるに至りました。また、明治30年には斜子織の切本を求めてオーストラリアの人が来日するなど、国際的にも有名になりました。そして明治32年に増産と品質保持を目指して結成された「武蔵白魚子本場組合組織」の組合員の数は約250名にもものぼり、産出額は100万円を超え、当地域の斜子織産業は最も隆盛を極めます。

しかし、こうした組合が結成されたものの、技術の伝承については組織的に行われていなかったようです。明治20年頃広瀬の人が大家村の多和目に斜子織の方法を伝授したという話があるほかは、姻戚関係等で副次的に伝習したようで、現在にその詳細は残されていません。断片的な資料を継ぎ合わせ、読み解き、懸命に再現活動を行った今回の成果が、後世の研究の一助になればと思います。

社会教育課と狭山遊糸会による協働事業（市役所エントランスホール）



ご協力いただいた方より

公民館との交流の扉

広瀬公民館 館長 須藤 秀毅

再現研究報告会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

さて、今年度は新型コロナウイルス感染症は緩和されましたが、インフルエンザの拡大により、社会全体が大きな影響を受け今もなお感染症の収束は見えない状況です。公民館では国や県からの要請などにより施設の利用の制限、またガイドラインに基づいた施設運営など、これまでに後退対応が規制緩和にて進歩の傾向となり、公民館の活動と共に歩んで来た団体のひとつが、狭山遊糸会です。

本報告のテーマは「広瀬斜子織」再現研究報告会。長年の研究実績並びに活動は高く評価されます。これまでの公民館は「地域」「学び」に軸足を置き、暮らしと地域をつなぐ拠点としてその機能を担ってきました。そしてこれからもその役割は変わることなく、様々な地域社会の困難を克服する拠点・出発点としての公民館の期待が寄せられています。

地域をつなぐ。時代をつなぐ。学びを次の一步先へとつなぐ。今、改めてこれらの「つなぐ」が、これからの公民館を創造する重要なキーワードとなるでしょう。そのキーワードの一つが広瀬斜子織です。限りない可能性を令和の時代に着実に「つなぐ」これからの諸課題に向き合っていくことを期待し、挨拶とさせていただきます。

写真右：広瀬公民館

写真右下：広瀬公民館文化祭

写真左下：広瀬公民館織物体験会



ご協力いただいた方より

「広瀬斜子織」再現研究報告会の開催をお祝いして

狭山市文化団体連合会 会長 小川 忠史

狭山遊糸会の皆さまが、10年間の年月をかけて「広瀬斜子織」再現の研究活動を実践され、本日その成果報告会が開催されることをお慶び申し上げます。

6年ほど前になりますが、斜子織りの生地や糸の分析を進めておられるときに、個人的にその作業のお手伝いをした事を懐かしく思い出します。資料もあまり残っていない中で、正に細い糸を辿って手探りで再現研究を続けて来られた皆さまの努力に感服し、「広瀬斜子織」の再現活動の継続とその成果に称賛をお送りいたします。

また、狭山遊糸会の皆さまには、狭山市文化団体連合会の自主事業の一つである「青少年文化体験フェスタ」において、長年、当連合会の一員として、子ども達に人気の「手織り」体験講座を担当していただいています。皆さまのご努力とご協力に感謝の意を表し、今後も「手織り」を通して子ども達に手仕事の楽しさ、素晴らしさを伝えていただけるようお願い申し上げます。

最後になりましたが、今後も狭山遊糸会の皆さまの手により「広瀬斜子織」の再現研究が進められ、ますます素晴らしい成果が得られることを祈念し、お祝いの言葉いたします。

文団連主催
青少年文化体験フェスタ

写真右：入間川小学校

写真下：狭山台小学校

